

土 淨



天章
元

四月號

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一週一日發行）
昭和二十四年四月二十八日郵務省特例換承認第三五二號
昭和三十三年三月二十五日印刷
昭和三十三年四月一日發行

第二十三卷

第四號

御歌

阿彌陀佛と

心は西に

空蟬の

もぬけはてたる

聲ぞ

涼しき

目次

巻頭言……………(1)

超六の大道……………伊藤宏天(2)

—親と子のためえの講話—

新道德の樹立に想う……………中島眞孝(6)

お佛壇の感化……………中川大仙(10)

新しい家庭道德……………伊藤智源(14)

童話一ふりの雨……………伊藤舉位(18)

インド見て歩き……………齋藤昭俊(22)

小説信生法師日記(下)……………鶴田湛泉(24)

偽らざる人間の姿……………佐藤賢順(29)

觀無量壽經講話(その四)

楢山節考は姨捨山の傳説を小説化したものである。食糧の少ない山村であつて、七十才に達した老人は男女を問はず楢山と言う、神の世界のある山へ捨てられねばならないのである。これがこの村しか知らぬ人達には一切の道理を超えて従わねばならない恐ろしくも嚴とした眞理となつてゐるのである。

辰平の母おりんは嫁が死んだので孫の世話をしてゐるが、楢山へ行く年が迫つたので、嫁探しを急いでゐる所からこの小説は始まる。やがて隣村に若い後家があつて辰平の後添いの嫁が出来たので一安心すると、辰平の長男にも愛人が嫁入つて来て、曾孫が出来ようとする。孫の嫁で一家の口數が増えたと、曾孫のある老人の居るのは、食糧のないこの村では一家の恥とされるので、そのことを見ない前にと、おりんは辰平夫婦を促し、夜陰に辰平に背負はれて家の裏口から楢山入りをすることになる。小説の大半は、村に食糧の少ない爲めに生ずることやおりんが永年かつてひそかに楢山入りの時の準備をととのへて居ること、辰平を促して楢山へ親を送るもののしきたりを實行させること、おりんの亡き後に嫁が困らぬようにすること等と、これに對して辰平の親を捨てかねる心境とが記され、又おりん一家と對照的に、もはや楢山行の年の來てしまつてゐる又やんと言う老人が、楢山行きを嫌つて息子をてこずらし、息子が村民に恥かしい思ひをしてゐることが記されてゐる。

おりんの楢山へ入つた日、雪が降つて來た。楢山へ入つた時に雪が降つて來るのは宗教的幸福の象徴と傳説されてゐて、おりんはそれを永年念願して來たのであるが、現實にその念願が叶つたので辰平はやや心を明るくして山を降るのである。所が、辰平が山を降る途中の斷崖にさしかかると、向側の巖頭で、繩で縛られてあがつてゐる又やんが息子の手で文字通りに谷底に向つて投げ捨てられるのを見るのである。又やんの體が谷底に向つて落ちて行くとやがて谷底から黒々とからすの群が舞い上つて來るのである。

日佛會館のベルナル・フランク氏は中央公論四月號で、「日本人と宗教心」の中でこう言つてゐる。「それは武田泰淳氏の話の中にあつたのであるが、楢山節考は深い意味で宗教的佛敎的作品であると言ふのである。このことばはいまだに私の心の中に残つて居り、突然にこの作品の眞相が私に開示された」と。

又やんがからすの群が谷底につき落されるのも、おりんが淨土の白蓮にも似た白雪につつまれるのも往生要集の現代版だとフランク氏は言う。業の問題は昨年來の佛敎界の問題であるが、業は死に處する平生の生き方のことである。従はねばならない眞理を眞理として處して行く所に佛敎的な生き方がある。眞理を曲げようとする所に迷信が生れる。姨捨ての非道さは問題外であるが、おりんと又やんには、それを前提とした生存があつたのであり、嚴として動し難い眞理だつたのである。業の日本の意味は、人間の最後に對する平生の宿願である。

超六の大道

大樹寺貫主 伊藤 宏 天



佛教圈、アジアの諸國を廻つて佛教徒が、大會を催すこと既に四回、來年はタイ國に於て第五回の豫定とか傳えられました。

佛紀二千五百〇一年、これは今年のこととて佛教圈諸國に公認のすがたであります。これが佛誕に基くものか佛滅に依るものか、何れを元としても多少の異論は御座いましやうか、佛教徒の紀元として一應二千五百年と判定し、今年が其れに一を加えて二千五百と元年で、何か云つて見たい氣がするし、何かやつて見たい氣も致します。

其の芽出度い年の春四月、聖誕お花まつりの日を迎えることに成りました。年と共に各地に於ける其の行事は盛大さを増して來ました。今年も賑うことでしょう。老いたる者の目にも美わしく、幼い者の心には一段と忘れ難い印象と成るようにな々に工風が凝らされて行きます。

花たつぷりな御堂の中に立てる佛の頭から甘茶をそゞぐおつとめは、謂ゆる「灌佛會」の文字通り、昔も今も變らぬが、七あし歩いたお話も、天上天下を指して「唯我獨尊」とうぶ聲を上げたと云うお話さえ、今も尙お繰り返されて居りますが果して文字通り其んなことが有つたのでしょうか。

そも／＼佛教が語り傳える數多いお話を、みんな實話ばかりと受け取つたら、随分おかしなことに成るでしょう。實話と説話（或は偶話とも云う）に分けて見て、何と説話の多いことか。設けた話は作つた話と云うことにも成るが、作り話と云つても荒唐無稽で、あてに成らぬ無駄話と云うので無く、其の一つ一つに意味を持たせた訓話であります。

物を見て理を悟る。これは佛教の大切な物の見方であります。物を物とだけ見て居るのでは物足りませぬ。水一滴

の中にも天地の理は含まれて居る筈であります。道理と云い眞理と云い大事なことはありませんが、物をはなれて生き難い人の世では、物を見せて理を悟らせるのが早みちであります。昔から「托事辨」と云われ、事に托して教を述べる、また「方便」とも云われることであります。ウソも方便などとは大まちがいで、佛教に方便は多いがウソは一つも有りません。方便とは方正にして便利なることを云うのです。即ち物を見せて理を悟らせるのであります。

お花まつりにつきものの七あし歩いたお話など、その方便説話の優なるものと思われまゝ。無量壽經の初めの方に「現行七歩」とあり、小僧の時から習い覺えた訓讀では、「現に行くことと七歩」で、七あし歩いたことに成りますが、「七歩を行す」と讀んだら何うなりますか。眞人生は第七道に在りと、超六の大道を教えたことに成りますまいか。

更にまた、まるの裸で直立不動、天上天下を指した「唯我獨尊」の雄叫びは、そも何を教えて居るのでしようか。大體、形にとらわれたら、現行七歩にしても唯我獨尊にしてもウソばかりであります。生れたての赤ん坊に出来さうな筈がありません。其れが出来たように云うのが説話であります。實際のところ此の話は、三十五才のおさとの所へ持つて行くとよく解ります。

生れ立ての赤ん坊が直ぐにやつたと云うので無く、いま

此所に生れた此の赤ん坊が、後年天下に名をなして（即ちおさとりを開いて）説いた教えが斯うなんだと、問わす語りに呑みこませるようにしたものと思います。

誰でもが偉く成り度い、立派に成り度い。立身か出世か成功か。みな一様に望むところの人情ながら、自他妄想の分別を去つて、まるの裸でその眞面目が見届けられたら、物みなの價值は絶對である。似た物は澤山あつても同じ物はたゞ一つ切り。私によく似た人に會いましたよと云われども、それは他人のそら似で私では有りません。たま／＼一町内に同姓同名が二人居て、郵便屋さんをまごつかせることが有つたとしても當人は一人ずつで絶對に同じ人が二人居るのでは有りまん。自分と同じ者は其れこそ三千世界、何所を探したとて見當らず、たゞ一人ここに居る自分だけだと氣が着いて見ると、我ながら何だか肩身の廣い思いと共に、このままでは何だか濟まないような氣がするのでは無いか知ら。全く「天上天下に唯我獨尊」と立ち上れるのでは無いでしようか。傲慢で無く不遜で無く眞の人間の自覺であります。物と云わす人と云わす、その本來の價值は絶對である獨尊であると云うのです。この氣持を淨土教で頂くと南無阿彌陀佛と成るので、無量の光明に包まれ無量の壽命に充たされる法悦の實感は、事の善惡、物の大小を乗り越えて、たゞ南無阿彌陀佛の中に收められ、南無

阿彌陀佛の中に進ませて頂くので有ります。斯うした姿を無碍の一道と喝破して其の尊嚴を説いた先輩も御座います。

次に、七あし歩いたと云う話に戻つて、前に云つたように、生れ立ての赤ん坊が直ぐに歩いたと云うので無く、今生れたこの赤ん坊が、後年、佛の悟りを開いて教えて呉れたことは、七歩を行することで、超六の大道、即ち第七道を行つてこそ、眞人生の價值と尊嚴とをわがものにするこゝとが出来るので、また淨土教で云うと南無阿彌陀佛の中に、自から開いて来る往生淨土の大道であります。超六の大道とは六道を乗り越えてと云うので、世間では六道の辻に迷わぬように眞直に行けと云うことであります。六道の辻と云うと或はお葬式のろうそく立てを思い出したり、墓所の入口の六體地藏さんなどを連想して、死んで行くことに結びつけて考える人があるかも知れませんが、佛教は現證法門で、もつと身近に今日のこと、現在この一生のことを先に教えるのが主なのであります。

輪廻轉生と云つて生れ變り死に變り、悪い事をした報いで地獄に落ちて苦しみ、漸く刑期が満ちて人間界へ放免され、今度は幸いと少しばかり善い事をしたので天國に生れたが、果報にまかせて遊び暮したために、果報に盡きて餓鬼道に落ちたとか、浮きつ沈みつ斯う云うことを繰り返して

て居ると云うのが、佛教以前の印度宗教の常識でありました。佛教は此の生死流轉を打ち切つて生死を解脱せよと教えるのですから、六道の中にウロツいて居るので無く、三惡道だ三善道だ、苦しい所だ樂な天國だなどと云つて見ても共にみな迷える姿だから、速かに六道乗り越えて第七道を行けと説くのであります。

釋尊最初の説法で有名な「離邊處中」と云うのが其の根本かと思ひます。「兩邊見を離れて中道に處せよ」と云うのですが、兩邊見とは苦と樂の二つで、印度の當時としては難行苦行をして天國の樂果を求むる人達と、順世と云つて放漫な享樂生活をして居る者達との兩極端があるので、前者に向つては非天と難じて其の眞の宗教で無いことを教え、後者に向つては非人と斥けて其の眞人生に非ることを説いたのであります。そして眞の宗教は眞人生を完うするものであるとの立場から、苦樂の兩邊見を離れて中道を進むのだと主張されたのであります。この兩邊見を詳しく説いて行くと四門とか五趣とか六道とかと成るので、結局、超六の大道、即ち、眞人の道は第七に在りと、現行七歩の説話と成るのであります。

更にまた今日でも一般社會の常識としては、善因善果、惡因惡果で、善い事をして置くと天國に生れて樂が出来、悪い事をして置くと地獄に落ちて苦しまねばならぬからと

善いこと悪いことに重點は置かれず、樂が出来るからとか苦しまねばならぬからとかの利己主義がもとで、自分の都合から割り出して行く態度が多いのですから、總て六道に迷える姿であります。斯うした善惡因果の執われを超えて、たゞ南無阿彌陀佛の中に力の限りを盡して最後のひと息まで、銘々のお仕事を勵ませて頂くのが超六の大道で、眞生は第七道に在りと云うので、一枚起請文に「たゞ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申して疑いなく云々」と示されたところであります。

ついでに云い添えて置きますが、最近は觀光バスが大はやりで老若共によくお宮やお寺へ參詣されますが、私は、「勝手なことをお願いして來なされるな」と頼んで居ります。世間には信心に名をかりて、罰や、たゞりや、さわりを恐れさせ、反對に、おかげ御利益で信心を勵まそうと云うのが多いようです。罰やたゞりで恐れさすのはおどし文句です。おかげ御利益で喜ばすのはたらし文句です。おどし文句とたらし文句で云うことを聞くのは幼い間だけです。中學生にでも成つたら、もう聞きません。つまり、おどし文句とたらし文句で信心を左右するのは幼稚な宗教か或は信徒が幼稚な扱いを受けて居るのです。前にも超六の大道が必要だと思ひます。私は何所へ參詣されても「佛法守護の方々、有難う御座いますとお禮をして來て下さい」と教えて居ります。如何でしょうか。(完)

會員だより

南無阿彌陀佛 合掌

立春よりはや半ヶ月たち紀洲路もぼつ／＼と冬眠もとけようと致しております。

諸先生様益々鑽仰會發思の爲、日夜御指進なされておられ、私達念佛行人にとり心強く思つております。

待ちに待つた淨土誌二月號本日拜受し、看護婦さんに御念佛を申したら、看護婦さんも合掌して下さいました。淨土誌が取りもつ美しい朗かな一とことでした。

私の病狀も入院後、おどろくばかりの好調子で主治醫先生も余り早くよくなると他の患者さんにもすまんと思はんかと申され、冗談にしろ嬉んでおります。

入院當時は、五ヶ年ぐらい療養せねばとても動く事は、おぼつかない(今では今年中に働ける様申してゐます。全快退院です)と申され、目前は一時はまつくらで御座居ました。入院前に、私を善導して下さいました。淨土宗の住職(和歌山縣那賀郡根來(權西澤本)法泰正平等院淨土寺)仲西貞善尼)でした。師の申された、なにもかも阿彌陀様まかせた身にどんな事が降り

かゝろうと、御念佛を申す事が「最上の善である」阿彌陀様はよきに／＼と私を生かして下さい。南無は私、「善固あれば善果あり」と御念佛を忘れない様くれ／＼も申されました。

入院後(昭和三十一年六月廿五日)日課念佛

六阡御名號 毎日／＼相續致してあります。御念佛しい／＼療養生活で御座居ます。本當に有難い旦暮で御念佛申さずには

いられませんか。近日中に私の念佛療養の體験記を送り致します。會員諸兄姉にも斗病生活なされてゐる方々もあるうと思ひます。

何爲淺學ですので、ご字もたくさんあろうと思ひますが、諸先生に、良き様にして下さいませ。一「T B」にも御念佛を」といふ題にしたく思つてゐます。

同封の一金千圓は淨土誌の爲に基金御供養します。合掌

南無阿彌陀佛 合掌

御法語に南無阿彌陀佛と唱へ給へば住所はへだつといえども源空に親しとす源空も南無阿彌陀佛と唱へ、たてまつる爲文也。念佛をことゝせざる人は肩を並べひざをくむといえども源空にうとかるべし三業皆異なるか故なり。

南無阿彌陀佛 合掌
よきに／＼に御導き下さいませ
諸先生様

親と子のためえの講話

— 其の一 —

新道德の樹立に想う

— 父よりその息子への手紙 —



中 島 眞 孝

○月○日附の手紙、一昨日の朝受取りました。其夜にでも直に返事を書きたいと思つて居たが、例によつて、學校のこと、お寺のこと、其他の雜事に追われて、漸く今日の日曜日の午後、少し落着いた時間が取れたので、此返事を書く。

先ず宅^{うち}では皆無事である。母は毎日元氣で家事を處理して居る、荻窪の姉も、西田町の妹も皆元氣で楽しくやつて居る様子であるから安心してよろしい。

さて早速本問題に入ることにする。今日の日本人は君の云う通り、道德的に見て混亂の裡にあつて、其歸趨を知らないと思ふ。太陽族などと呼ばれる者が

多くの青年の中の一部の者にしろ、出て来るのはその顯れであり、紀元節復活に關する賛否兩論の論議の模様などを見ても、それを示して居るものであると思ふ。しかしそれだからと云つて、日本の將來が君が云う通り暗黒で、全く希望のないものであるとも思われない。元來我國民は有史以來初めての悲惨な經驗である敗戦に遭遇して、國民的自主性を失い、道德的歸趨に迷うて、物事を如何に考え、如何に行動すべきかの規準を失つて居るのである。前の文部大臣であつた天野貞祐氏などが、是れを憂えて倫理綱要と云うようなものを發表したこともあつたが、いろいろな批判を受けて、そのままになつて終つた。勿論今日

のような新らしい國際情勢の下にあつては、從來の如き國家至上主義的な忠孝一本を基本とする國民道德を再現すべきではあるまい、新らしい社會に適合する新らしい道德を樹立しなければならぬことは勿論である。しかしながら新らしい社會に適合する新らしい道德の樹立と云うことは決して容易なことではない。社會情勢が複雑となり、機構も變つて來たのであるから、新道德の内容として盛られるものも變つて行かなければならない。このことは確かである、何人と雖ども日本の舊道德のままでよいと考えて居る人はあるまい。所がその新道德の内容として如何なるものが盛らるべきか、と云うことについては、その人その人の立場の相異によつて大に異なるのである、それで天野氏の提案も葬り去られたのであつた。しかし世論が如何にあらうとも、新道德が樹立されて居なくとも、私達は個人として實際に日々生活をし、事を處理してかな行けばならない。それで君の手紙にも訴えて居るように「何等かの據り所を持たなければ不安に堪えられない。」と云うことになるのであると思う。それで私は私なりに常に考えて居ることを述べて見たいと思う。

私は「人間」と云うものに深い信頼を置いて居る。廣く世界の人類に對して、特に日本人に對して深い信頼を置いて居る。いろいろなことが云われては居るが、終戦後の日

本の復興は實に目醒ましいものであると思う。しかもそれが優れた政治家、學者、思想家、若しくは企業家と云うような少數の偉大な人物の指導によつてではなく、謂わば日本人一般大衆の力で成し遂げられつつあると云うことは注目すべきことであると思う。少數の優れた人々の指導によつてなされたのであるならば、若しそれ等の人々が居なかつたならば如何になつたであらうかとも考えられるのであるが、それ等の人々の力によつてではなく、日本人一般大衆の力によつて、即ち日本人全體の勤勉と叡智とによつて成し遂げられつつあると云うことが私をして日本人全體に對して深い敬意と信頼とを持たせるのである。

又アジア、アフリカ諸國が今や民族主義に奮起つて努力して居り、インドのネール首相が強大な國力を背景としてでもなく、世界各國の間に斡旋し發言して居る姿を見ては寔に微笑ましいものがある。原水爆は今世界の人々の恐怖の的となつて居るが、私は世界の人類の良識と善意とに信頼して、人類の最大の災禍は免かれ得るものと思つて居る、そして恐れられて居る原子力はやがて私達の生活をより幸福にして呉れることになると思つて居る。

私は斯くの如く日本人の勤勉と叡智とに深い敬意を拂い、廣く世界の人類の良識と善意に厚い信頼を寄せて居る。しかしながらこれは手を拱いて傍觀して居て出来ることで

はない。私自身が日本人の一人であり、世界人類の一員でもあるから、私は私なりに私の立場に於いて此聖業（私は敢えて聖業と呼ぶ）の一翼を擔い、その完遂に参加し、出来るだけの寄與をしなければならぬと思つて居る。私は現在青少年の教育の仕事に従事し、又他面に於いては寺院の住職者でもある。それは何れも教化に關する仕事である、それで私は私の仕事の上に次の三の目標を立てて、私自身も私の生活の上に實現し、更に青少年、その他、私の接する程の者の上にこれを實現するように努力して居る。その第一は他人及び社會の福祉増進を念とすること、第二は誠實性を有すること、第三に勤勞精神を昂揚することの三である。これを稍々委しく解説して見よう。

先づ第一に他人及び社會の福祉増進を念とすることであるが、これは總べての道德の基本となるべきものであると確信する。人間が各自正當な利益幸福を追求することは勿論非難さるべきではないが、總べて人は自ら利己的傾向を持つて居て、これを恣にする、不知不識の間に他人の利益を害し、社會の秩序を亂すと云うことになる。故に第一に他人の利益幸福を計り、社會一般の福祉増進と云うことを念とすべきである。終戦後に頻に唱えられて居る基本的人權の尊重、自由平等など云う理念も他人の基本的人權の尊重、他の人々に於ける自由平等の主張ではなく、自分自

身の利益のために主張される場合が多いのではないか。他の人々の利益のために主張されて居るのでないから、所謂民主主義の本義が没却されて終うのであると考えられる。故に基本的人權の尊重と自由平等も自分の自己主張のためでなく、先づ第一に他人の利益のため、社會一般の福祉増進のために主張さるべきである。

第二に誠實性を有すること。此所に云う誠實性とは其人の眞實性を保つと云うことである。或人が或主義主張なり、思想なりを持つて居て、其人が常にその主義主張に忠實に生きて居ると見る時に其人は誠實性を持つて居ると云うのである。其人の言動は常に一貫して居つて變ることがないのであるから、其人に期待し信頼を置くことが出来るのである。例えば何か或切迫した事情とか、又は或種の誘惑の下にあつて誠實性のない人は如何に言動するであろうかと云うことを豫想することは非常に困難であるが、誠實性を有する人に對しては、我々は我々の豫想を裏切らないと云う信頼を持ち得るのである。誠實な人は常に高度に正直である、しかし正直であると云うことは其人の姿の一部をなして居るのであつて決して全部ではない、ただ其人の態度は常に明瞭であつて、ハッキリして居るのである、故に我々は其人に期待し、信頼を置くのである、即ち「當てにする」のである。斯様な特性は如何なる人にも必要であ

るが、社會の指導的立場に立つ人には特に必要である、世の中での指導的立場に居る人は此誠實性があつて始めて部下の人々の信頼を得て、本當の仕事が出来て来るのである。

第三には勤勞精神を昂揚することである。我々人間の生活はこれを經濟的な面から見て、消費者としての生活と生産者としての生活との二面があると考えられる。日常生活に於いて衣食住に諸種の物資を消費し、更に精神的な方面に於いて各種の美術、音楽、演藝などの觀賞、或は諸種の讀書などは何れも消費者としての生活である。是等は何れも他より供與されて居るものである、少くとも他人の生産したものを我々が消費して居るのである。そして其反面に於いて我々は皆何等かの職業を有し生産に従事して居るのである、その生産されるものは必ずしも物質的なもののみでなく、精神的な價值の生産もあるのである。政治家は法律をつくり、制度を制定し、又は改變して、社會の秩序、運営と云う價值を生産し、醫師は病氣を治すことによつて、人の健康を生産し、教師は人を教育することによつて有爲の人材を生産し、宗教家は各種の儀式を司祭し又布教することによつて、人心の安定、向上と云う價值を生産して居るのである。斯くの如くにして社會は組織され、各成員の間に往來して居る價值の交換と云う法則に従つて互に協力し合つて、社會は成立して居るのである。故に我々は

消費者としての生活に於いては質素儉約を旨として總べてのものを生かして行き、生産者としての生活に於いては勤勉力行して、各々其職業にいそしみ、充分なる價值を生産するように努めねばならない。佛教に謂う所の「一日働かざれば一日食わす」の教は、斯様な意味から考えて深い意義を有するものであると云える。

以上の三の目標は私が常に私自身の身に體して行わんとし、又人にも説いて居る所である。これからの日本に如何なる新道德が樹立されるにしても、この三は絶対に必要であると思ふのである。道はあまりに大に、あまりに遠くに求めてはならない、「先ず脚下を照せよ」である。道を近きに求め、日常生活を正しく、楽しく營んで行くならば道は自ら拓け、「聖業」を擔うことになるのである。君も世の中の暗い面ばかり見て考慮しないで、努めて明るい方面に眼を向け、常に希望を持つて勉強もし、生活して行くことが必要であると思ふ。自重してやつて行つて呉れそれが人生であると私は考へて居る。

(大正大學教授・芝罘園高校校長)

◇

◇

◇

親と子のためえの講話

— 其の二 —

お 佛 壇 の 感 化



中 川 大 仙

北陸の片田舎に育つて東京の大學に研究を續けている山本一郎さんのお話

私の親友の一人に熱心なクリスト教の信者がいました。時々クリスト教の話聞かせたり又 會えも誘はれ一緒に行つたこともあります。私は先祖傳來の淨土宗であります。が淨土宗の教をはつきりと身につけている譯ではありません。から何となしに親友のいうがまゝになつていました。ところが親友が私にクリスト教の信仰に入るように眞剣に勧めました。その親切は私にもよく分りますがその時私ははつきり斷りました。私は幼少の時からお佛壇にお参りす

る習慣に育ちました。そして時々お佛壇のお参りがすむと祖母がお供えしてあつたお菓子をお達に分けてくれました。私達は喜び合つて頂いたものであります。又母につれられてお寺へ行きました時、お寺で大勢で食事をしました。黒塗の大きいお椀で御飯を頂き、とても嬉しかつたのであります。こゝろ記憶がいつになつても明るい氣持を味います。誠に簡単なこゝろした記憶が自然親友の勧めに對してはつきり斷わる事になつたのでございます。この親友の宗教的熱意に對して私も念佛の教を實踐することに努めていきます。その親友とお互に信仰を尊重し以前にも増して友情を厚くし互に勵み合つてゐる次第であります。

石川病院の院長さんのお話

小池さんという男の大學生が入院しました。

小池さんはクリスト教を信じている眞面目な人でした。

私は淨土宗で念佛の信者でありますが小池さんの信仰を尊重しその宗教的態度に敬意を表し親切に治療いたしました。親族友人等の看護を受けて静養せられましたが病氣が段々重態になりました。病人は信仰により病苦の惱みに打ち勝ち却つて親族友人を慰めていました。いよいよ危篤状態になりました。私は病床を離れず最善の處置をいたしました。靜かな室内に病人のかすかな呼吸の音だけ聞えるのであります。靜に最後のお別れを見守つて居る時、病人の呼吸からかすかにナムアマダブツ／＼と聞えたので思はず一同合掌同音低聲稱名いたしました。稱名の聲が止ると呼吸も止りました。

病人の母は念佛信者でありました。母の胎内にいる時から念佛に育てられ幼少時、庭教に於て念佛により育てられその精神に念佛が薰習して如來大悲の慈光に守られていた事が今茲に最後の稱名の聲となつて表はれたのであらうとこの時に居合せた人達が皆喜び合いました。

私は四十年前以前布哇開教中日本語學校經營、その學校を卒業し加州にいる佐藤徳治さん夫妻昨年十二月來訪下されてのお話

先生四十年目で再會本當になつかしいです。

夫人を紹介し、二人で子供二男二女の寫眞を出し全部大學卒業させ、長男は私の農場を繼ぎ、一人は醫師、二人は先生になつています。子供達は兩親の丈夫な時に日本に觀光した方がよいと勸めてくれたものですから往復飛行機三週間の豫定できました。九州から北海道まで各方面見學をして自由解散になり、祖先の故郷新潟へ行きました。布哇に在住していた兩親は私が加州へ渡つて間もなく歸朝し故郷で老後をお寺參いりを樂しみに一生を送りました。遠方にいたものですから思うようになりませんでした。今回はゆつくり親戚の人達にも來て頂いて兩親生前御世話になつた事を謝し、兩親の事についても詳細聞かせてもらい兩親に面會しているようになつかしくございました。墓參をし法事も營み親戚の人達にも大變喜ばれました。さて話は布哇少達時代から今日に至る苦心談に移り、日系二世の活躍の根本精神宗教事情を聞きますと。

中にはクリスト教の信者になる人もありますが多くは親の信じていた佛教を信じています。自ら佛教徒であるとい

う態度をはつきりしています。各自信仰を尊重し社會生活も圓滿であります。大東亞戦争の時日系二世も多く出征して勲功を立てました。殊勲功の日系二世の一兵士が名譽の重傷を受け臨終に迫つた時、隊長は彼は佛教信者であるがこゝには僧侶はいない。牧師に代つて彼を慰めるようにいきました。牧師は隊長の命により彼に近づき神に祈を捧げようとし、彼はアイアムブツデストと合掌稱名して終りました。この事がその隊長も牧師も彼の堅實の信仰に敬意を表したということであります。

佐藤さんは天然色活動撮映機を持つてきました。布哇に一週間の豫定ですから先生の現状を知らせたい。加州にも布哇から渡つてゐる者大勢居りますといつて撮映をして喜んでくれました。日曜學校當時を偲び合掌の氣持を續けてゐる佐藤さんに慈光照護お十念して別れた。

四

四十歳になる未亡人の體驗談

私は二十五歳の時主人に急死せられました。

主人の母は健康で嚴格な勝氣な人でありました。男の幼兒二人殘され、家業も無く家産という程のものも無し、只主人の收入に依存してきたのでありますから前途を考えると恐しくなりました。只涙の中に四十九日も終りました。

目にふれて見えたまわねど身にえひて

まもるほとけのぢひぞとおとき

佛様のお慈悲に導かれたのでしよう今迄拜んでいました白木のお位牌を只木造の位牌として拜んでいましたことが勿體無く、この白木のお位牌にこそ主人が佛様のお慈悲を頂いて私共を見守るために表はれて居られるのであると深く信じて合掌念佛申しました。それから大變氣丈夫になり之からの生活という事にも前途に光明が見えてきました。母とも相談し幼少の子供二人をお守りしながら留守をして頂いて私は仕事に出ることにきめました。母も心よく私の願を聞いて下さいました。毎日勤勞生活を續け、夜は白木の位牌の前で主人に勵まれ母と子供と共に談笑するのであります。時の流れは早いもので十五年たちました。お蔭で皆が健康に恵まれまして今では二人共大學に通うて居ります。孫達の成長を見て母も大變喜んで居ります。

若い未亡人の悩みは生活苦に對する男性の親切であります。親切は喜で受け感謝すべきものである筈なのに、若い未亡人に取つてはその親切の裏に男性の誘惑を感じ取る所に悩みがあります。私も何遍かこの悩みを味いましたが、幸いな事に嚴格で世に聞えていた母がいましたのでその誘惑に打ち勝つことが出来ました。私は白木のお位牌を主人の生ける姿と拜む所に私の生きる道を見出し、道中誘惑の苦難の坂は嚴格なる母のお蔭で安々と越え、近く大學を出て社會に立つ時、主人に喜で頂けると今は只その日を待ち

み佛に感謝しつゝ働いて居ります。

五

四十二歳になる夫人の體驗談

私は女學校時代熱心に教會を通ひまして自らクリスト教の信者になつたつもりでいました。

結婚致しました家は淨土宗で、兩親は熱心な念佛信者でありました。お佛壇も中々立派で佛像も先祖の位牌も莊嚴に安置し、香華燈明御供養も丁重で、主人も兩親のなさるまゝ佛前の禮拜を嚴修していました。私がクリスト教を信じているということを承知で、信仰の自由を認めてくれましたので私は毎日曜教會に通ひ内一人で神に祈るのでした。

お互の信仰尊重の意味で私も佛壇禮拜の時は敬虔な態度を失いませんでした。子供が生れ始め女の子が男の子、胎教にも心しましたがさて幼少の時の庭教となるといろいろ考えさせられました。兩親はお亡くなりになりました。主婦として、祖先のお供養、兩親の追善、毎日佛壇のお給仕等に於て更に考えさせられこの事について主人ともよく相談してみました。昭和二十七年三月お寺に五重があるから加入を勧められました。主人は家業の忙しい事よりも重大な信仰問題を解決したいというので工場も店も皆親戚の方に任せ二人共五重に加入いたしました。五日間は午前七

時から午後五時まで嚴格な規律の下に行はれました。二人はよく聽聞し、よく念佛禮拜して無事に五重相傳を受けました。私は始めて念佛の尊さありがたさに氣付かせて頂き、只南無阿彌陀佛と唱えることで親む子も祖先も子孫も我が家も隣人も平等に光明遍照に在す大光明中に攝取せられることは實に今の喜びであつて又永遠の喜びを味ひます。宗教の絶對性と申しましょうか、只この南無阿彌陀佛と申すだけで救はれるのですから幼少の時にもこのお念佛が一番尊く感ぜられ、佛壇前では子供も一所にお念佛を喜で唱えるようになりました。今迄はこの念佛に到着する準備で教會の教も今茲に導かれた事と受取、今は念佛一つに決着心安く毎日喜び働いて居ります。

特價奉仕

- 一、寺院用佛具類一式
- 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

親と子のためえの講話

— 其の三 —

新しい家庭道德



伊 藤 智 源

近頃私のまわりに起つた家庭問題が二つある、一つは老父の死亡による遺産相續争い今一つは娘夫婦の家庭から娘の實母を追ひ出して養老院へ送つた事件である。此のような事實に直面して我々浄土教徒がどう考うべきかを書いてみたい、先づ前者は八十五歳を以て一生を終えた老父が生存中は財産の分配をせず若し分配して子供等に與えれば自分はどうな虐待を受けるかも知れないからと最後まで譲渡をしなかつた愈々亡くなつてみると相續人が各々平等の權利を主張して長子から少しでも多く分配を受けようとするこゝとなつた、法律上は平等の分配が建前であるから。

一方のは母親が連れ子として再縁し永い間苦勞して育てた娘であるが夫に死別してから此の娘を頼りとして嫁に行

つた先で一緒に暮らしていたが遂に娘夫婦と衝突し老いた母は行く先もなく養老院に收容されたのである。今此の二例をみるに何れも終戦後の社會變動に基いて特に新憲法の民主々義精神の表われとして此のような問題が起つたものと考えられる、民主々義が自由と平等とを其の骨子としていふことは云うまでもない、昔のような長子相續制を今日復活することは許されず平等に財産分配が行われるようになつた事は民主々義の結果である、又親も子も別々の生活をするといふことも民主々義的であらう、然しながら此の兩者を取つて考えると共通の點がある、それは皆權利の思想に忠實であることである、財産分配についてもお互が權利を主張して長子と同じに取ろうとするし子供夫婦は生存權

を主張して生活困難を理由に生みの親までも捨てようとする、此の権利の精神は歐米思想の根本をなすもので民主主義はこゝから發するものである。元來權利思想は個人主義思想から發するもので個人と個人とを引き離す作用をなすものである、そこに和合と云うことが困難になる、従つて親子や兄弟の仲を權利思想は引き離しその間柄をほぐしてばら／＼にするものである、こゝに個人主義乃至民主主義の大きな缺陷があると考えられるのである、勿論民主主義がかような分離作用のみを營み結合する力のないものであるかという元來はそうではないがこれを間違えるとそういう結果になるのである。民主主義は人格尊重主義でもあるので本當の意味で民主主義が徹底すれば人格相互の理解と尊敬を、従つて結合を、増すものであるが現實はその悪い面にのみ民主主義が利用されて眞の意味の民主主義があらはれてはいないのである、眞の民主主義は一面權利を主張すると共に反面又義務を主張するものである。この義務の面を考える事の不十分なのが今日の民主主義の缺點であるからこの點を大いに改めて社會の風潮を改善しなければならぬ、こゝに佛教の必要が出てくると思う。佛教では個人の人格を認めるが其の結果利己主義となつたり集團生活を破壊するようなことには反對するものである。寧ろ自己滅却によつて全體の共同生活を全うせしめることを教える

ものである。所謂無我の生活である、佛法僧の三寶中僧寶は和合を教えるものである。以上の二例に於て親子の關係を考えるのに恩を受けた娘が親と不和になることは之は許さるべくもない、佛教は到るところ親子關係に於て孝道を教えている、父母恩重經、六方禮經、淨土三部經等何れも然りである。尤も近時の生活の困難なことから、親を養いたくとも出来ぬとの聲を聞く、終戦後の各自の生活は切りつめられ俸給生活者を見ても夫婦と子供の生活をするのがやつとで親をみる程の餘裕がないということも云われる民主主義の行はれているアメリカの定めた今日の給與規定からは度外視されるのも止むを得ないことである。然しこれを佛教の立場から考えるならば決してかようなことは許されない、無我沒我の生活を教え和合を説くことから考えるならば自分を抑え犠牲を忍んでゞも全體の幸福を計らねばならぬ。自分を抑へ一杯の御飯も二人で分ち合う精神があつてこそ一家の和合が計られるではないか。今佛教々典中親の恩を説くものを引用してみると心地觀經第二に恩について四つ説いている。「世出世の恩に其の四種あり、一に父母の恩二に衆生の恩三に國王の恩四に三寶の恩なり、是の如きの四恩は一切の衆生平等に荷負す」と説いているのがこれである、「悲母長養の恩は普天に彌り憐愍の徳は廣大でたぐいがない、世間の高しとする所は山岳に過ぎるも

のではないが悲母の恩は須彌にも逾えている、世間の重しとする所は大地を先となすも悲母の恩はそれにも過ぎていゝる、此の故に能く勤加修習して父母に孝養をするならば佛に供養すると其福は異ることがない」とも云つてゐる。次に六方禮經の説話がある、佛陀が王舍國なる雞山に在したとき尸迦羅越という長者のひとり子があつた、尸迦羅越は毎朝曉に起き水に浴し衣を着けて虔しく東西南北天地の六方を各々四拜するであつた、佛陀は遊化の途次遙に之を見たまい尸迦羅越を訪ねられ、「尸迦羅越よ六方を拜するはどうゆう譯であるか」「世尊よ、父在世の頃、六向拜をなさしめました、六方を拜するのがどういふ譯であるかは存じませんが父の死後いま尙お繼續して行つて居ります、」「卿の父が六方を拜せしめたのは單に身體で六方を拜せよとゆうことではあるまい」「世尊よ六方を拜する理由を御説明下さいませ」……「尸迦羅越よ、東に向つて拜するは子の父母に事うるをいう、父母に事える五事とは一、生を治めること、二、早起して奴婢を令し飲食をつくらしむること、三、父母の憂を増さないこと。四、父母の恩を思うこと、五、父母病あらば速に醫を迎えること。」と教え給うたのである。

以上親子兄弟の家庭生活に於て和の必要なことを述べたがさて念佛の生活は自ら以上のような和合の生活を生み出

すものであることを感ずる、選擇集第十五章段（六方の諸佛念佛の行者を護念し給ふの文）に「觀念法門にいわく、又彌陀經にとき給ふがときもし男子女人ありて七日七夜をよび一生を盡して一心にもつばら阿彌陀佛を念じて往生を願すればこの人つねに六方恒河沙等のほとけ、ともにきたりて護念し給ふことを得。かるがゆへに護念經となづく、護念經といふころは又諸惡鬼神をして、便を得せしめずまた横病横死、横に厄難あることなく、一切の災障自然に消散す、不至心をのぞくと……すでに護念をかふむればすなはち延年轉壽を得る」とあつて念佛者が現世に於てみ佛に守られて安らかな生活を送ることが出来ることが述べられ和ぎの様子がうかがわれる。又念佛の行者を佛が護念し給うことにつき三緣（親緣、近緣、増上緣）ということがある、善導大師の觀經疏定善義に親緣とは「衆生行を起して口常に佛を稱すれば佛即ち之を聞きたまふ。身常に佛を禮敬すれば敬即ち之を見たまふ、心常に佛を念すれば佛即ち之を知りたまふ、衆生佛を憶念すれば佛も亦衆生を憶念したまふ、彼此の三業相ひ捨離せず故に親緣と名づく」とあり、近緣とは「衆生佛を見奉らんと願すれば佛即ち念に應じて目前に現在す、故に近緣と名づく」とある。かくて念佛者には護念の得益が得られるので無量壽經には「其れ衆生ありて斯の光りに遇はむものは三垢消滅し身意輕柔に

歡喜踊躍して善心生ぜむ、もし三塗勤苦の處にありて此の光明を見たてまつらばみな休息を得てまた苦惱なく、壽終の後みな解脱を蒙らむ」とあつてお念佛の生活者には親子の間の争とか兄弟の中の仲違いということとはなくなるのである。佛檀が家庭生活の中心であり朝夕み佛に合掌禮拜する家には親子兄弟の間の争は起らないと思う、我々の慾情には限りがない、慾を通せば家庭の圓滿は得らるべくもない、かゝる慾念を靜めて頂くのがみ佛の御力であり合掌する時の我々の氣持である。

以上「新しい家庭道德」と題して述べてきたが内容は一向新味がないではないかとの非難も起るかと思うが道德に新舊ということは考えられない、道は古今に通じ不易のものである、かゝる點からはどんな時代となつても道に變化のあるはずがない、たゞ時代に於て表現の形式が異なるのみである、従つて道德の本性からして新舊はないのであるがたゞ今の時代に即應するような道德は考えられる、従つて書いたことに少しも昔と變りがないと考えられてもそれは道德の性質上止むを得ないことである。たゞ然し今日の民主義時代に於てどう考へて行くかゞ問題でそこに新しい家庭道德が考えられるので、私は以上のように民主義に佛教の信仰を取り入れ拜む生活を強調することにより之を改革して行く必要があることを痛感するものである。

(大正大學教授)

(二九頁よりつづく)

刑に處してしまつたが、更に嘉祿三年六月廿一日、大谷の法然上人の墳墓を破壊して上人の御遺骸を無謀にも加茂川に流さうと企て、廟墳を破り房舎をてぼつた。この時、頼宮の内藤五郎兵衛尉盛政法師西佛、子息一人と共に之に向つたので、彼の武勇におそれをなして退散してしまつた。が、このまゝに捨て、置いては、執^{しやう}擁な山門大衆に再び襲はれて、墳墓をあばかれる恐れが多分にあつたので、都の西郊へ改葬することゝなつた。

事もあらうに遺骸をあばかうとする無暴な法難をきくと上人に教を受けた念佛の信者は、諸國から陸續と悲憤の涙で馳せ集つて來た。

御遺骸を遷す途中で、大衆に襲はれて奪取されてはと、宇都宮頼綱入道蓮生、千葉六郎大夫入道法阿、澁谷七郎入道道遍、頼宮兵衛入道西佛等武士の出身の面々、家の子郎黨を率きつれて、信高等遺弟と共に千餘人、軍兵濟々と前後をかこんで護つて行つた。

皆、唇をかむ思ひで黙々と歩んでいる。その中に、信生法師の姿も交つていた。

翌、安貞二年正月廿五日の曉、更に西山の粟生野の幸阿の許に遺骸を移して茶毘に付し、茶毘所の跡に堂を建て、御墓堂と稱して念佛を修していたのが、現今の光明寺の由來である。

(終)

童話

一ふりの雨



伊藤舉住

むかしインドの國に、アシダという、仙人
がおりました。

アシダは、術もすぐれており、人がらもり
つばで、そのころインドでは、名高い仙人で
した。

ある日のこと、アシダが町を歩いていると
道ばたに、寶石が一つおちていました。アシ
ダはそれを一目みると
アッおやつ！ これは少しおかしいぞ」

とつぶやいて足を止めると、じつとその寶石
をみつめていましたが、丁度その時、一人の
男が通りかかり、この寶石をみつけて、早速
それをひろおとししました。

ところがそれを見たアシダは、

ア「おまち！」と聲をかけました。

男がおどろいて振向くとアシダなので、

男「おおー！、これは仙人さん……何か」

ア「その寶石はちよつとあやしいのだ」

といつて、何を考えたのか、いきなりその寶
石をけとばしました。すると寶石はコロコロ
コロッと、六七メートルほどころがつたと思
うと、パッ！ とくろい煙りになつて、空え
まいあがりましたので、男は驚いて、

男「仙人さま。どうしたのでございます」

とたずねた時、空中から

「アシダ、よくもおれのじやまをしたな、

おぼえておれよ」

とうすきみわるい聲で叫んだものがありまし
たが、まもなくその聲もやんで、あとはしず
かになつてしまいました。

ア「ああ！ あぶない所だつたよ」

男「いつたいどうしたわけです」

ア「悪魔が人間の世の中に、悪いことをま
きおこしにきたのだ」

男「へえーどうしようとしたのです」

ア「もしおまえがあれを拾うと、心がわる
くなつて、よくばつたり、人をごまか

したり、なまけ者になつたり、うそを
ついたりするようになる所だつた」

男「やれやれあさましいことでした、あぶ
ないあぶない」

ア「これから氣をつけたさいよ」

男「ハイ、ありがとうございます」

男はアシダに助けられ、自分が悪人にならな
かつたことを、喜んでいたころ、アシダの力

で失敗した悪魔は、自分達の仲間の所にくると

悪「今日はアシダのやつに、ひどい目にあわされたよ」

1 悪「どうしたのだ」

悪「己が人間を、みんな悪魔にしてやろうと思つて寶石に化け、拾つたものから悪人にしてやろうと、道ばたに待つていと、一人の男が通りがかり、もう少しで拾う所を、アシダがみつけて、とうとうだめにされたよ」

1 「あいつは、われわれなかまには、いやな相手だ」

これをきいていた悪魔の大王は

王「アシダは、おれたちのじやまばかりするにくいやつだ。しかしあいつはなかなか手ごわいやつだから、あいつのいない所へ行つて、うんとあばれ廻り、人間にわるいことを廣めておいたら、いくらアシダでも、手がつけられまいさあ己についてこい。」

こうして悪魔たちは、人間をもつと悪いものにしようとして、アシダの氣付かない、他の國えいつて、悪い心をふつこみました。

それからまもなく、方々の國で戦争がはじまりました。しかしこの戦争は、いつまでも

長々とつづいたので、人々はだんだん戦争につかれてくるし、あきてしまい、不平をいうものが、めつきりふえてきました。

×「いつになつたら戦をやめるんだろう」

△「戦争はいやだね、人はころされる、物はこわされる。」

○「物を作つても、自分たちの使うものは、何一つ作ることができないんだ」

□「いくら働いても、みんな戦争という、人ごろしのために使われて、我々の楽しみや、幸福のためには、何にも使うことができないんだからね」

×「もういいかげんにやめてほしいね」

△「どうせたのしいくらいができないのなら、働いてもつまらないよ」

○「もう仕事はやらないよ」

□「戦争にいくことも、ごめんこうむろうよ」

こんなことをいいあつて、王様からいつかつても、戦争にいくものが無く、たとえ無理に戦場つれていつても、まじめに戦いをする者は、一人もありません、どこの國もみんなそんな有様ですから、戦争はいつの間にか、やめになつてしまいました。

そして誰も彼も、みんなが怠け者になり、まじめに働く者がなくなつてしまい、かけごとをして暮したり、人のものをこまかしてみ

たり、ずるい金もうけをしたり、世の中はすつかり亂れてしまいました。

このことを知つたアシダは、わざわざその國にやつてきて、まじめに働いて、働くあそぶことを説いてまわりました。

悪魔たちは、自分たちのやつたことが、だんだん成功してきたので、大喜びでしたが、そのうちに又してもアシダがやつてきて、折角悪者になりはじめた人間を、またもとのようにしてきたので、こんどは他のことで苦しめようと考えました。

1 悪「アシダのやつが、又われわれのじやまをしまったぞ」

2 「人間が、そろそろまじめになつたぞ」

3 「もつと何とかしないと、我々がまけてしまふぞ」

王「よし！　こんどは病氣だ」

悪魔は病氣をはやらせることをはじめました。インド中に、わるい病氣が、たちまちひろまつて、みるみるうちに、たくさんの人が死んでいきました。

これを見たアシダは、自分の知つてゐるかぎりのくすりを使つて、人々に與え、くすりの作り方を教えてあるきましたので、これもアシダの勝になりました。

悪魔たちはますますおこりだし、大王はカンカンになつて

王「よし！ いよいよおれが、最後の力をだして、アシダの力に勝たねばならぬい」

悪「大王、どうします」

王「人間どもを全滅させるために、ききんにするのだ。これから後は、一つぶの雨もふらせるな、おまえたちも、どんなことがあつても、雨をふらせたり、水を出したりしてはいけないぞ」

一同「へエイ」

王「何年も、何年もひでりつづきにして、一つぶの麥も、一にぎりのあわも、とれなくしてやるのだ」

さてそれから後は、一滴の雨も降りません、半年、一年、二年と天氣がつづきます。

井戸の水もかれてしまい、川の水もすつかりなくなり、畑のものも、田のものも、野原も林も、草も木も、何もかもみんな枯れて、一つぶの米も、一にぎりの麥も、樹に一杯の粟もとれません。そのため食べ物がなくなつて、死んでゆくものなどできませんでした。しかし此度ばかりは、アシダの術でも、どうすることもできませんでした。

アシダは涙を流して残念がりました。

ア「私の修行の力がたりないため、このききんを救けることができないとは、いかにも残念だ、私はもつと行をつんで人々の難儀を救けてやりたい」

こういつてアシダは、森の中に入つて、修行をつづけることになりました。

これを見た悪魔たちは大喜びです。

悪「勝った勝った勝った」

アシダに勝った

勝った勝った勝った

已達勝った

悪魔たちは、うたいつ踊りつ、此の世の中を、自分たちのもののようになり、あばれまわりました。人々には来る日も来る日も、ギリギリ照りつける日の下で、満足に呑む水も無く王様のいいつけで、少しばかりづつ施される食べもので、どうやら生きていくだけですがそれもだん／＼少くなつて、もうインド中の食べ物を集めても、大した食べ物が無いような有様になりました。

こうして三年程すぎた、春のある朝のことでした。

アシダはいつものように、枯木ばかりの森の中で、修行をしている時、急に體にしつとりと、つめたいものがかかるのを感じました。目をとじていたアシダは、フト目をあけ

て空を見ると、こまかいきりのような雨が、しずかにふつていました。

ア「おお！ 雨だ！」

アシダは行をしていることも忘れて、思わず立上りました。しかし雨は、すぐに止んでしまつたので、がっかりして又坐りこんで

ア「ヤレヤレ、せつかくふりだしたのに……だがおかしいぞ、この空は雨のふる空ではないのに……それなのに今たしかに雨が降つたような気がしたが……夢ではあるまいかしら……」

アシダが、そんな事を思つてるとき、フト、鳥の聲がきこえました。

草も木も枯れ果て、鳥もいつか姿を消してもう長い間、鳥の聲など聞いたことのないのに、今その鳥の聲がきこえたのです。

ア「おや！ 鳥の聲がする」

アシダは思はずあたりを見廻しました。その時アシダの目にうつつたものは、今まで枯れていた木々に、おおおおと葉がしげり、その枝に、小鳥が楽しそうに、飛びまわつてゐる姿でした。

ア「あつ、木の葉がしげつてゐる」

それから氣がついて見ると、草も緑にしげつて、きれいな花が咲きみだれ、一しづくの水もなかつた、そばの小川は、一杯の水をたたえて、水音もにぎやかに流れ、井戸からは、

どんだん水があらわれているのでした。

ア「おお、川にも、井戸にも水が……」

アシダが見たあたりの景色は、先き程とはまるで變つて、田には稲が、畑には麥や粟や豆が、ふさふさとみのつています。

ア「これは何という、ふしぎなことだ、さつき、少しばかり降つた雨で、こんなになろうとは考えられないのに……」

アシダは、ふしぎに思つて空を見上げましたが、その時南の空が、美しく輝いているのが目につきました。

ア「あの光は只ごとではない、何か大きな喜びのあるしるしだが……」

アシダは、その光の方をさして歩きだしましたが、やがてその光は、カピラ國という國の王様の城から、輝いていることが知れました。

ア「おお、これは王様のお城からだ……」

そうだ、噂によれば、おきさきのマ―ヤさまに、お子さまができたとのことだつたが、するとお子さまが、お生れになつたのではないかな……もしそうとしたら、私の術でも、どうすることもできなかつた、惡魔の力を打ち破つて、人々の苦しみを救済になる、尊い力を、生れながらにお持ちになる方とは、何とすばらしいお方だろう」

アシダは、すぐに城の入口にとかけつけました。早くもそれを見付けた家來たちは、

家「アシダどの、王子さまのおうまれになつたことを、もうご存じか」

と聲をかけました。

ア「何！ 王子様が……矢張りそうでしたか早速その王子様に、おめにかかりたいものです」

家「さあさあ、早く行かれるがよい」

アシダが城の中に入ると、中は何となく喜びにみちたさわがしきで一杯です、アシダはすぐに王様にお目にかかりました。

ア「王様、おめでとうございます」

王「仙人よ、よく來てくれた、さあ王子にあつてやつてくれ、ふしぎなやつでな、生れるとすぐに歩いたそうじやよ」

ア「おお矢張りふしぎなお力を、おもちの方でございましたな……王様、城の外をござらん下さい」

アシダは、王様をさそつて、高い物見のやぐらの上に昇りました。

ア「王様ござらん下さい、あのように、枯れていた草木に花が咲き、田畑のものもみのり、井戸の水もあふれ、川には水が美しく流れております」

説明を聞く王様の目には、野も山も、一面に

みどりの色に榮えた、春の景色が、繪のように見られました。

王「これは又、どうしたというのだ」

ア「王子さまのご誕生と同時に、このふしぎなできごとでございます」

王「あの恐ろしいききんから救われ、すべてのものが満ち足りた、私はこの王子に執達多と名をつけよう」

ア「執達多さま、よいお名前でございますこのふしぎなできごとは、これは王子さまのなみなみならぬ尊さであり御成人の後は、世界の人々をお救いになる、尊いお方におなりになることでございます……ただ私はもうこの年で、王子のりつばにおなりになつて、尊い教をお話になるありさまをみるのができないことが、残念でなりません。」

こういつて、アシダは思はず涙ぐみました、此の時、城の外には、國の人々の喜びの聲が、大風のようにきこえてきました。

それは四月八日おひるすぎインドはカピラ國のできごとでした。

(おわり)

*

*

*

*

インド見て歩き

齋藤 昭俊

マトラ

マトラは丁度デリーとアグラの中間にある。こゝはペナレスと同様最も古い都市である、その證據に私が行つた時家が大部崩れ落

ていた。それは昨日の地震でやられたものである。同行のインド人がもう暫らくしたらこの町は皆くずれてしまふのではないかと云つていた。そして又ペナレスと同様ヒンズーの聖地である。ペナレスのガンガに匹敵するのがマトラではジャムナ河である。このジャムナ河とクリシナの傳説は有名なものであるが、最もクリシナ神が生れたもの、このマトラであり、カウ、ボーイをしていたものであり、戀をさゝやいたのもこゝであるのだから。マトラも有名なガートがある。マトラもやはりガートとお寺の町であるが、お寺の町というところと誤りになる。というのはこゝから六マイルばかり離れたところにピリンダーバンという處があるが、こゝがお寺の町で、有名なお寺がいくつもあるし、クリシナがラダと戀をさゝやいた所もある。(猿が屋根から屋根を傳はつてゐる猿の多い町である。)

ピリンダーバンの寺院

人は皆マトラと一諸に考へてゐる位であるが、ピリンダーバンはマトラから六マイルばかり離れた町である。こゝがクリシナの戀の地であり、いくたの傳説をもつ地である。こゝは有名な寺がいくらかある。最も大きな寺はラングシ・テンプルで東西に大きな門をいくつかもち、周りは高い堀で圍まれている。

中には金の柱がある。これは一八四五から五年にかけて、ゴービンド・ダスジが四五萬ルビー(一ルビーは約七五圓)を投じて建たものである。赤砂岩で建られた三階の寺院がその近くにある。これはゴービンド・デブと呼ばれるが、ラヂア・マン・シンが一五九〇年にたてたものである。それから大理石の寺院が、これはラクノウのスハ・クンダン・ラル一八七六年にたてたとのことだ。この裏手が有名なガードになつてゐるが、別名ネツクド・バス・つまり裸の水浴場である。クリシナが裸で水浴していたところ、ラダやその他の娘が見つけて、着物をとつてからかつたところ、巡禮者にとつて重要なところはニデイバンである。こゝは庭園なのだが綺麗などころではないが、クリシナがラダと戀を語り合つたという、今は猿が戀を語り合つてゐる。

博物館

古い都市、つまり歴史的に重要な都市には必ずといつていゝ位、考古學博物館がある。お釋迦様が説法をなさつたところサルナートには、あのインドの象徴となつてゐるアシヨカ王の塔のライオンがある。こゝは佛教に關するものが全部である。佛陀の像や寺院建築の柱や色々な彫刻、マトラは最も古い都市で

ある。この博物館は古いグプタ朝のもの、像や彫刻が澤山並んでいる。古いインドの匂が強くひしひしと感ぜられる。そのリアルな彫刻、古代インドがまねくと云う言葉があるが正にそういう感じた。マトラからマグラを通つて中央インドの方へ向けて、急行で一時間程でガワリヤにつく、こゝには巨大なフォートがある。こゝで見つけられたもの、それは十五世紀のものだから、こゝは十五世紀考古學博物館という、マンマンデル宮殿や、マハラヂヤ宮殿がのこされているが、マグラのそれに比べるとずうつと小さい、フォートの園いだけはいしたものだ、又、デリーのレッド・フォートの中にも近世に關する博物館が有る。

タジ・コハールの由來

タジ・コハールの純白の巨大な幾何學的建築は全く驚異である。その線と赤とに映つてゐるタジ・コハールはアグラのジヤムナ河の右岸に立つてゐる。その名はタジ・ビビーカー・ラウグという。アグラ・フォートから約半マイル位、世界の驚異の一つである。スハジャハンは十九才の彼女を一六二二年にもらつた。彼女マムタジ・コハールは凄美美人であつた上に頭もよく、すべて國家の重要事は彼女の裁決を得た程だ。彼女は常にスハジャ

ハンの陰について、よく彼を助けた。彼と彼女は全く強く愛し合つた。しかしその結婚生活は一七年で終りをつけた。一六二九年スハジャハンが王位繼承後二年カハン・ジハニ・ロジの反亂(デカンの支配者)があり、彼女も一諸に進軍したが、彼女は十四人目の子供を産んで、産後が悪くその十二月になくなつた。彼の悲しみは極度のものとなり、數週間は全く誰れにも會はなかつた。音楽も踊りも禁止、すべてのぜいたく品は禁止、二年にして彼の頭は眞白になつてしまつた。一六三一年にアグラへもどり、タジの建立を計畫、技術者をベルシャ・アラビヤ・トルコ等から招き、純白の大理石をマクラナやライワル(ジヤイプール)から採つて、フェイトブル・シクリから赤砂岩、凡ゆるところから寶石や石を集めて、一六三一年にその工事が始まり、一六四八年の終りに完成した。この期間二〇萬の人間が毎日働いた。いくらかかつたかわりはつきり分らないそうだが、五百萬ポンド(日本ではこれに千をかければ圓になる)位ぢやないかということである、この偉大な建物は彼女への愛のしるしなのである。世にはあゝ愛程偉大なものはない。

黄金寺

ベナレスのダシヌート、テンプル別名黄金

寺と呼ばれる。屋根が金メッキで出来てゐるところから、この名は生れたものであろう、こゝはベナレスで有名な寺であるが、もつとも今インドで有名である。そして又外國人を絶對に入れないということでも有名である。私はセイロンの友人、セイロンは殆んど人種がインド人と同じだから分らない、彼が私を日本から來て、佛教徒なのだ。他の外人とはわけが違ふということで強引に私を入れてくれた。お陰で内部を見ることが出来た。中は狭く、おまいりの人達でごつた返してゐる。丁度雨のあとだつたから、汚れた水がたまつていて、そしてインドのお寺は必ず靴をぬがせられるのだが、泥水の中を歩いてゐる見たい。全く汚ない。澤山のリングが供えつけてある、供えてあるのではなくて、祀つてあるわけだ。この狭い中に牛が入つていたとは恐れ入つた。全くインドである、そして何のことはない。他のお寺と別に變りはないのだが、外人を入れないというので、余計に反響を呼んでゐるのだらう。又以前はバラモンやチャットリは入れたが、シュドドラや賤民は絶對に入れないかつたそうだ。大部時代の波がよせてきているようだ。とにかく私が入れたのだから、もつとも宇野さんは二年もベナレスにいてまだ入れないそうだが。

信生法師日記

—下—



——鶴——田——湛——泉——

△三▽

漂然と旅に出た信生は、都の空をふりかへりつゝ逢坂の關をすぎ鏡山を越えて、やがて小野の宿に泊つた。妻を亡くしていたので大番の往復には遊里にも耽れたこともあつたが、今は遊女の姿にも眩惑されない彼である。

そののみか、信生の心は、遊女達の有様を眺めて同情の心が注がれるのであつた。渡世の道は、いづれも苦しい習であるが、殊に彼女等の境遇はあわれに思へた。尊い人生を、いつ浮ぶともない泥沼のやうな日を送つてゆかねばならぬ身の上がいと惜まれてならなかつた。

彼の信仰は、雲水の生活によつて更に培はれて行つた。旅に出て四時の遷り變り、自然の照光を味つていると、念佛は一切をはなれて三界を滅却して、如來の大悲に没入する教であることがしみじみと痛感されて来る。こんな氣持が鳴海がたを通つた時、強く感じられたものか、日記に述べ懷している。

「たま／＼うけがたき人界をうけて、極めてあひがたき佛教にあひながら、かくしつゝむなしくあかしくらしして又三途のふるさとに歸りて諸の苦をうけん時、天に仰ひで悲しび、地にふして歎くとも誰か助くる人あらん。必ず俗念をのがれよともの給はず、汚穢不淨を論せず、時處諸所をえらばず、只常に名號をとへて極樂をねがはゞ、かならず生るべき御ちかひにあへり。ながく三界火宅をのがれ、

化樂不退の國にうまれて、長時永劫に無爲のたのしびをうけんこと、只罪惡生死の我等が爲也けんとおもひつゞくるに、よろこびの泪そでをうるほし、人界の思ひ出此時にあり、流轉に沈む身であるのに、このまゝ救はれる如來の大悲を痛感しては、喜びの泪たゝえて、佛の姿をひしと目前に描いては、

たのみある誓しのだ（野田）の もりの月

もれじな露も 干枝のひかりは

と歌う信生であつた。

彼の旅は修道の旅であると共に、又作歌の旅でもあつた。路々歌を詠じては、路のほとりの木や、橋に書きつらぬ、又、大番勤仕に度々往還したことのある彼は、宿々に昔知つた人に逢つては歌を書き與へた。

八橋、宮路山、橋本と泊を重ねて池田の宿にと着いた。

こゝには、彼が昔馴んだ侍従といふ遊女がいた。

信生は、なつかしく思つてか、長者の屋形に侍従を訪ねて行つた。

侍従は旅僧を凝視したが、まさか朝業とは氣付かぬらしい。自分を訪ねてくれた見なれぬ行脚の僧を、あやしむやうにげんきに眺めるのみである。

今宵一夜の宿を乞うてみたが、うさなんものと思つたのであらう貸しげもなかつた。

信生は苦笑を洩らしながら筆をとつて、一首を認めて示

した。

むかしみし 姿にもあらず 成りぬれば

池田の水も かげをやどさず

小野の宿の遊女の業苦に沈む身の上に深い同情の涙を注いだ彼のことである、今も尙、苦海に沈んでいる侍従のため、彌陀の救ひの道をねんごろに説いて聞かせたに相違ない。

さ夜の中山をすぎると菊川である

菊川の流れに臨んでは、かの承久の亂の中心人物であつた中納言宗行卿のいたましい末路に心を馳せては、

菊川に露のなさを とゞめ置きて

はかなき 名をも 流しけるかな

と、同情の涙を注いだ。

うつゝの山を越え、手越の宿をすぎ、清見の關をよぎり、蒲生の宿に泊り伊豆を廻つて、樹下石上の露の宿にも泊りを重ねて、やがて鎌倉に着いたのは、二月の終りの廿九日であつた。

信生は、三月四日から二位殿の持佛堂に閉ぢ籠つて別時の念佛を修して、亡き將軍の後世を心から弔つた。

春雨が、しと／＼と降つている。いと靜かなる夕暮である。

今は、主人實朝の觀賞も得られずに、淋しく咲き初めている櫻花に宿る雨露も、信生には、涙のしづくと映るのであつた。

誦經が終ると、雨が止んだのか、にぶい月光が射し込んで來ていた。

△四▽

鎌倉を立つた信生は、いる間川を渡り、上野のこうの山の麓に泊り、淺間の煙を見ておぼすて山へとかゝつた。

かつて實朝につかへていた頃、親しく交つていた舊友伊賀光行の謫所の生活の無聊を慰めようと、おぼすて山の麓にたづねて行つた。

光行は、承久の亂の時、最初に血祭に上げられた伊賀光季の弟である。

伊賀光季は、廣元の子息親廣と共に京にあつて近畿一帶の警衛の重任に就いていたが、承久の亂起るや、官軍三浦胤義の八百騎に取り圍まれ、僅か廿七騎の手兵と共に立て籠つて戦つたが、矢を射つくすと、炎々と燃えさかる火中に身を投じて果てたのであつた。

光季が勇壯な最後を遂げて豪名を馳せて以來、彼の弟式部丞光行はさして功績とてなかつたが、兄の代りとして重用され政所執事として全勢を極め、その所領は全國五十二ヶ所の多きに及ぶに至つた。

光行の妹は北條義時の後妻となつて伊賀の方と呼ばれ、政村と一女を得ていた。

義時が病篤になると伊賀の方は光行と計つて、娘婿の宰相中將實雅を將軍に推し、我が子政村を執權の後繼となし

光村は後見人として幕府の實權を握らうとする陰謀を企てた。このため鎌倉は兩陣營に分れて一時騒然となつたが、義時が卒まると政子は、頼經を奉じて將軍とし、伊賀一派を斷乎處分してしまつた。

實雅は官位を奪はれた上、越前に配流となり、伊賀の方は伊豆の北條に蟄居を命ぜられ、光行は五十二ヶ所の領邑を奪はれた上、信濃に囚閉され、薙髮して西光と名乗つていたのであつた。

訪れて見ると、光行の謫所更級の里は、人煙から全く隔絶された僻地であつた。

粗末な萱屋の屋根は苔むし、蔦かづらからみつき檐は傾きかけている。

折柄の殘照の微光も、いと淋しげににぶい。ひっそり静まり返つた茅屋から主人が唱へるのか誦經の聲が聞えて來る。

小折戸を開いて訪れ聲をかけると、出て來たのは顔見知りの若侍であつた。

思ひがけない人の訪れに、その若侍は、

「おゝ、朝業どの」

と、思はず一歩進んでいつた。

僧形の朝業の訪れは異外だつたらしい。

直ぐ奥へ飛んで入つて、主人にかくと告げた。慌てゝ出て來た光行も驚き顔だつた。

信生の顔を見るなり光行は、はや涙ぐんでしばし言葉も出なかつた。

信生も、これが、かつて幕府の政所執事として權勢を振つていた光行の姿かと思うと、餘りの變り方に、萬感胸に迫つて來た。

光行の風貌はすつかり變つて、兩頬はこけ落ち、その僧形はうら淋しさうである。

光行は、信生を奥へ喜び迎へると、二人は爐を圍んで（燈）火にあたつて語り合つた。

光行は、舊友の親身の來訪を感謝にみちた目で、

「かやうな古屋の内に閉ぢこもつて、短い春の夜も明しがたく、まして秋の夜長は殊に千々に思ひに沈んで暮しがたく思ひすごす心中お推察下されよ。身にそう物とてはな／＼今はこの地で朽ち果てねばならぬこの光行を忘れずに、遙るばる訪ねてことを（かたじけな）辱く存じます。日頃憂きことの多いつらさもかき消すごとくうれしく存じまする」

昔の情誼を忘れないで訪ねてくれた信生の篤い友情に涙ぐんで禮を述べた。

まことにさもあらうと推し計られて、信生も同情の涙を禁じ得なかつた。

今の境遇では、遠來の珍客をもてなす何物とてもない。たゞ語り合ふことのみが唯一の宴（うたげ）であつた。互の話はつきようもしない。

そこへ幼い子が、父の悲境に悶々たる心をも知らずに、喜々として父にまつわり戯れる容子を眺めて、信生の目に涙がにじんで來た。

すると、遙か故郷のことが想ひ起されて來て、早や將來に何の希望も期待することも残つていないやうなみじめな暮しであつても、光行親子が、むつまじく暮している容子がうらやましくなつて來るのであつた。

謫所での長居は、却つて世に恐れ憚るところあると思はれたので、つきぬ名残を惜んで命あらばと、再會を約して辭し去つた。

外へ出ると、夜が更けたのか、青白い月光は、くまなく下界を照らしていた。彼は夜道を歩いた。

信生の向うところは、信州路であつた。

信州には、名高い善光寺がある。彼はその善光寺へと志していた。

うら／＼かな日和の旅が続いた。信州路は、坦々としてひらけている。

青空の薄雲、畑の菜の葉、遙かなる山の緑、行く手は明るくあた／＼かく、まるで如來の懷に抱かれているやうであつた。

△五▽

善光寺から諸國の風光を賞で廻り、再び信生が鎌倉を訪ねたのは、翌年の秋であつた。僅かの間に、思ひもよらぬ

ことが起つていた。

知遇を受けた尼將軍政子が、この年の七月十日、七十才で薨去された。ときいて落膽のあまり、呆然自失の衝撃を受けるほどであつた。

「秋には必ず修行いたしたい」と彼に洩らした言葉が思ひ出されて、(生ある者は必ず滅する)とはいへ、今更ながら現實の人生の心細さが痛感されて來て、苔の袂も憂ひの色を添へる思ひであつた。

さきには實朝が薨去した悲しみが未だ晴れやらぬに、その上に、今又尼將軍との別れに逢つて、なげきもいやまさるものがあつた。

あれやこれやと思ふと、軒端に細々と鳴くこうろぎの聲も一層淋しく聞えて來る。

鎌倉にいつまでも留る用件とでもなく、悲しみのみ増す思ひだつたので、故郷の方へ修行せんものと、鎌倉を去つて行つた。

早や秋も濃くなり、武藏野の原には、乙郎花が咲きみだれていた。萩の花も、そよ咲く風になびいている故。

郷に廻つた信生は、修行のたよりをしようと、鹽谷の我が館を久々に訪れた。

いつも忘れる時とてはなく、旅枕の曉の夢に見ていた子供等も、早や拾四と十三になつて見違へるほど大きくなつていた。さすがの信生も、成長した我が子の姿に安堵の胸

をなせ下し涙ぐんだのはいふまでもない。

今年は、亡き母上の十三年に當ると子供等がいう。

さゝやかな妻の十三回忌を修めると、泣いてとどめるとし子との切り難い恩愛の情を斷つて、再び雲水の旅にと志した。

その折詠じた。

今更に この名残をや なげかまし

つひのわかれを おもはざりせば

の歌を以つて、彼の日記の筆はとめられている。

新拾遺集に、世を捨て、後、尙のがれ得ぬ事のみ侍ればとて、

さゝがにの いとひしかひも なき世かな

かくてもなとか くるしかるらん

の彼の一首が載つている。

彼は出家しても、尙やるせない思ひであつたらしい。人生の煩みは、永久に解決されぬだらう。しかし一道の光明は見出せるはずである。

信生は、出離の一道に勵んで人生の眞髓を把み、光明を見出さんものと、尙も修行に進んで行つたのであつた。

△六▽

建保の頃、たび／＼念佛停止の勅が下つたが、一向にきゝ目がなく、ます／＼念佛の流行して行く情勢を妬んだ山門の大衆は、法然上人の弟子隆寛寺西等を訴へて、終に流

(以下十七頁につづく)

偽らざる人間の姿

佐 藤 賢 順

何度か繰返えしたことですが、觀無量壽經の教えは三福と定善十三觀と散善九品くほんと南無阿彌陀佛の四つの部分に分けられます。今晚は第三の散善九品のお話です。

散善とは氣が散つている日常の生活そのまゝで行う善い行いという意味で、九品とはその日常性にある人間の九つの種類の型タイプという意味です。九品は九ヒンと讀まず、九ホンとか濁つて九ボンとか讀んでいただきます。

前にお話した定善の方は、特別に靜かな場所へ引込むとか、山へはいるとかして、冥想をこらして離念を取り去つて、美と眞實と愛の世界である極樂を、眼の前にありありと見ることでしたが、それは特別に優れた素質の人か恵まれた境遇にある人でなければできないことで、その上、非常に難かしいことです。これに對して散善は日常の生活を

営みつつ行う善い行いです。善い行いといつても、ただ道德的な行いではなく、特に宗教的な行いをいうのであります。また定善十三觀は一つ一つの行いを次々に積み重ねていく順序を縦に述べたのですが、散善九品は日常性にありながら善い行いを爲すことのできる人間の様々な素質を横に分類したのです。

觀無量壽經は人間の素質をこういうふうに分けます。まず上・中・下と三種類に分けます。この三つに分けるのは無量壽經でも同じことですが、このお經は更にこれを細かに分けます。上・中・下のそれぞれをまた上・中・下に分けます。それで九つになります。上品・上生じやうげん・上生じやうじやう（上の部に屬する人の中でも、最もよく宗教的な世界に生きることができる人をいう意味です）。上品中生・上品下生・中品上生・

中品中生・中品下生・下品上生・下品中生・下品下生、これが九品です。人間の素質にいくらかのニュアンスがありますが、それを九つに分けて表わしたのです。これが觀無量壽經の人間論であります。この九品の分け方は一人一人の人間の値打ちという價値的な見方から分けたのではなく、むしろ素質の異りという方面から分けたと考える方が、このお經の趣旨にかなつていと思われれます。上品上生の人、最上の素質を持つた人であるけれども、人間としての尊さにおいては、下品下生の人の上にあるというわけではありません、というのは、佛の救いの力は心の劣つた人にも同様に及んでくるのでありますから。

ところで九つの人間類型はどういうふうに區別されていくかといえますと、これを一々細かに述べるのは厄介ですから、二つ三つを擧げて、凡そを知ることが出来る程度にしておきますが、上品上生は、宗教の世界に生きるための行いとして、次のことが出来る人です。まず三心さんしんを具足すること、三心というのは、宗教の世界に生きるため是非必要な心がけで、第一が、まごころ、第二が、自分の力の果はたなさを見極め、佛の救いの力を深く信ずる心、第三が、すべての善い行いを、覺りを得るためにふり向けて、覺りを得て佛となつたならば、まだ宗教の世界へ心を寄せる機會のない氣の毒な人々に、目を開かせて、導いてやろうとす

る心、この三つであります。これは心構こがまえですが、これに實際の行いが伴います。その行いとしては、慈悲の心が深くて生き物の生命いのちを取らず、佛教徒としての戒律を守るとか、熱心に大乘の經典を讀誦するとか、佛・法・僧・戒・捨・天の六つを念ずるとか、そのどれかを行う人です。このような人は宗教の世界に生きることが出来るというのです。これが上品上生ですから、これに準じて考えていけば、それ以下の型タイプは大凡そ見當がつくので、人間の素質は少しづつ下つていくわけです。上品中生は必ずしも聲を擧げて大乘經典を讀誦しなくとも、その意味をよく理解すればよい、そして佛教の根本義である一切皆空の義（意味）を疑わず、大乘を諦あきらまず、これらの行いを宗教の世界に生きるために振り向ける人であります。こういう善根は初めにお話した三福を詳しく説いたものです。釋尊は三福を説き出して、すぐやめてしまいますが、それはまだ機縁が熟さなかつたからであります。今は機縁が熟して、聞いている者も、理解ができる程度になりましたので、ここで細かくお説きになつたわけです。

これから次第に下へ下つていくのですが、途中を省略して、終りの下品とはどう型の人間でしようか。いろいろの惡を重ねて慚はづかしい人、戒律を破り僧團の共有物を盜む人、下品のうちでも特に最後の下品下生は最も惡くて、五逆十

悪といつて、重い罪、あらゆる悪いことの數々を重ねた無智の人、愚鈍の人であります。こういう五逆十惡、無智愚鈍の者で、當然、三惡道に墮ちて長い間の苦を受けねばならない者でも、善き友に教えられて、命終るときに、眞實の心を以て、南無阿彌陀佛と十聲、佛の名を稱えるならば、その佛名の力によつて、一聲一聲に、長い間の罪が消えて、極樂に生れることができる、とこのお經は教えるのです。出家したり山に籠つたりして冥想するどころではない、また日常の生活の間にお經を讀んだり佛教の眞理を信じたりすることもできない。惡の數々を重ねた心の劣つた愚か者でさえも、眞心から佛の救いを信じてその名を稱えるならば、そのような者でも必ず佛の導きを受けて、美と眞實と慈悲の世界に生きることができると、というのがこのお經の人間觀が行きついた結論でした。

このお經は人間を凡夫として取り上げております。このほんとうの意味を見出したのは、七世紀のシナの唐の時代の善導大師でした。善導大師以前にも觀無量壽經の人間觀を註釋した人は多數ありましたが、上品は上生から下生に至るまでみな菩薩だと解釋したり、菩薩も無論人間には違ひないのですけれども、特別に心の力の優れた人で、自分で佛陀となるために六波羅蜜というような難しい修行を長い間續けることのできる人、むしろ架空の人物といつても

よい位のもので、日常生活に實在する人ではありません、下品は大乘を學び始めた人だと解釋したりしてゐるのです。しかし善導大師はそういう見解を捨てて、上品から下品に至るまで、すべてが五濁惡世の凡夫である、たゞ上品はたまたま大乘の教えに遭遇することができた人、中品はせいぜい小乗の教えを知ることができた人、下品は運惡く罪惡を犯すような破目にぶつかつてしまつた凡夫（これを遇惡の凡夫といふます）である。と解釋したのであります。そしてこの下品下生の人間を救ふことこそ、このお經の本意であると考えました。

善導大師が觀經の人間觀を高く評價するようになつたのは、彼自らの自己把握、人間探求が非常に眞剣であつて、自分のほんとうの姿を見つめてみると、そこに把えられた姿は、觀無量壽經に説かれてゐると、全く同じであつたからでありましょう。大師はこう書いております。

「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來、常に没し常に流轉して出離の緣あることなし。」（觀經疏）

また外のところで、こうも言つてゐます。

「自身はこれ煩惱具足せる凡夫なり。善根薄少にして三界（欲界・色界・無色界）に流轉して火宅を出でずと信知す。」（往生禮讚）

善導以前の解釋家の人間觀は、人間には佛性があるとか

人間は菩薩として修行をしてこの佛性を開顯できるとか、
 いう一種の理想主義のとりこになつて、かくあるべき人間、
 可能態としての人間ばかりを見て、今現にかくある人間、
 現實態としての人間、罪惡生死の凡夫を見なかつたのであ
 ります。善導大師の人間探求によつて佛教の人間觀は大き
 く轉廻しました。

法然上人はそつくりこの見方を受けついでおります。善
 導と法然とは場所からいつてシナと日本、時代からいつて
 七世紀と十二世紀という隔りがありますけれども、考え方
 の傾向はよほど似ていたと見えて、法然上人はそつくり善
 導大師の考え方を受けております。これは晩年になるほど
 はつきりして「偏に善導に依る」としばしば立場を明かに
 しております。法然上人も自己の探求においては善導大師
 に劣りません。上人はこつております。

「我は烏帽子えぼしもきざる男なり。十惡の法然房、愚痴の
 法然房が念佛して往生せんといふなり。」

「あしたにも夕ゆふにも營むことは名聞、昨日も今日も求
 めるものは利養。」

法然上人は自分の人間としての眞の姿を「知慧の眼またこし、盲
 い、行法の足、なえたる此の頃のわれら」であると見たの
 であります。この人間の見方、自己の反省は親鸞聖人にお
 いても一遍上人においても受繼れて、日本淨土教の人間觀

となりました。具體的にありのままの人間の本性を追及し
 て、偽らない姿を把えたのです。こうして平安から鎌倉へ
 かけての日本佛教は、古い人間像を破壊して、ありのまま
 の人間の姿へと迫つたのであります。

こういう人間探求は近頃の言葉でいえば、實在探求でし
 よう。サルトルやカミューやボーボワールの假借なく人間
 のほんとうの姿を描き出している實在文學に心をよせてい
 る人は多いが、われわれの過去の文化財の中にも、法然や
 親鸞の血みどろの實在探求があつたことを知る人は割合に
 少いではありませんか。ましてその方向を示したのが唐
 の善導であること、觀無量壽經こそ偉大な實在文學である
 ことを知つてゐる人はなお少いのでしよう。今の實在文學
 は人間の不安や絶望や孤獨を描いていて、何の救いもない
 ようですが、このお経はこうした不安や絶望の人間に名號
 による救いを與えております。それが王妃草提希を通して
 語られてゐるのであります。

申し遅れましたが、先に釋尊が説いた定善の教えは、隨
 他意の教えといつて、他人の希望によつて説いた教え、草
 提希に尋ねられたから説いた教えですが、散善の教え、そ
 の中でも名號は、隨自意の教え、釋尊が自分の本當の意志
 から説いた教えといわれています。

(大正大學教授)
 (NHKより放送の要旨)

浄土の會員を一人て

も多く

◇どなたでも會員になれます。

◇會費は半年二〇〇圓、年額四〇〇圓です。

◇會員には毎月「浄土」を配布します。

◇この會は皆様の會ですからその發展の爲に、お一人でも多くの會員をつくつて、正しい信仰運動をひろめましょう。お知合いの方々にぜひおすゝめ下さい。

◇お申込は振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

後記

○春陽のうら／＼と輝く季節、櫻花の散る中に、四月七日法然上人御誕生日、八日釋尊降誕會と、此の月の行事が修せられる。

○眞の佛教の信仰を身につけていた人、吉田三郎先生が亡くなられて一年、淡々と流れる、一句一句、一文一文の珠玉の名文とその御姿が腦裡にとどまる。その美しい道跡と共に。

合掌 南無阿彌陀佛

○十四、五、六の三日間、櫻の花どらで莊嚴された大本山増上寺では、報恩感謝御遠忌法要が厳修せられる。栃木 野村有秋、東京 原口徳正、群馬 長谷川徳巖の各師が唱導師。宗務長 渡邊眞海、東京北川俊嶺の各師が代理導師。○今年の合同第三回教學大會は、京都知恩院で六月二十二、三兩日に開催される、全國本宗の學者教化者の參集を期待される。○本誌の竹中信常先生は多年の研

究成果である「宗教心理の研究」

（青山書院刊・A五版・五七六頁・價

一、二〇〇圓）を著述刊行される。

その内容については、いづれ本誌上で紹介させていただきます。

○この處、宗祖七百五十年御遠忌を目前にして、本宗でも色々出版計畫が盛んである。先に石井教道先生の大著「法然上人全集」・坪井俊映先生の「浄土三部經概説」が成り、近く阿川貫達先生の「浄土宗義概説」が出される。

○編輯同人の宮林君、四月五日兼ねて許婚中の、河原みつ子さんと、戒師佐藤密雄先生、媒妁武田兵助御夫妻により華燭の典を挙げられる。以後二人三脚の君、二對一では内心怖れをなす。

○本誌の印刷所、共立社では今度鐵筋五階建のビルを新築、二十二日には竣工式。春山社長大はりきり次號よりは、その新社屋で本誌も生れることでしょう。

○讀後、心に残るものを持つ雑誌を念願しながら。（水谷）

會費（誌代）

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手數料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「浄土」 四月 號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十三年三月廿五日印刷
昭和三十三年四月一日發行

（定價三十圓）

編輯人 竹中 信常

發行人 佐藤 密雄

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京品川区上大崎一ノ七八二
發行所 法然上人鑽仰會

振替 東京八二一八七番

幼稚園 保育園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのぞ
ットで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

値段改正中 材料値上りの爲お値段は下記の一・二割高です

銀ブランコ2人乗	¥ 13,000
銀ブランコ3人乗	¥ 15,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)
組立説明書送付

宗祖法然上人七百五十年御忌記念出版

浄土宗日常勤式

發賣中

○定價 一部金三十五圓

十部以上(一部につき三二圓)

百部以上(一部につき三〇圓)

送料實費

○オフセット・美麗折本(香澤梵成師名筆)

内容(和讃勤式付)(吉田定久譯)

- △香偈 △三寶讚 △三泰讚 △歡佛偈 △懺悔偈 △三歸禮
- △開經偈 △四誓偈 △本誓偈 △一枚起請文 △攝益偈
- △念佛一會 △別回向偈 △總回向偈 △四弘誓願偈 △三身
- 禮 △送佛偈

お申込は

浄土宗教化團中央本部へ

東京都港區芝公園十九號地浄土宗務所内

浄土宗教化團中央本部

振替東京六一九三九番
電話芝(43)一三八二番